

サンクト・ペテルブルグ点描

野口武久

(詩人)

エカテリーナの離宮を出ると

また小雨がやってきた

銀色の霜の芝生に

傘をさす人はいない

落葉が散っていた

コートの衿を立て

白樺や菩提樹の葉は

帽子をかぶった人の群れは

金色こんじきに光をはねかえし

足早に黙って行き過ぎる

丘陵地を越え

ロシアの秋は短い

ネヴァ川を越え

冷たい雨期の季節は

市街地までも

いっしんに雪の風景に向かう

すっぽりとおおう

時は黙したまま通り過ぎてゆく

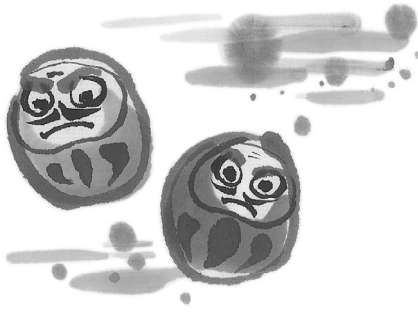
路面電車やバスが行き交う

ネフスキー大通りに

酒林

SAKABAYASHI

随筆特集



詩

サンクト・ペテルブルグ点描 野口武久…1

婚活の時代 池井優…4

ジャズ熱中人 高橋和島…6

絵と文 国技館 堂昌一…8

ガラスのころろ 安森敏隆…9

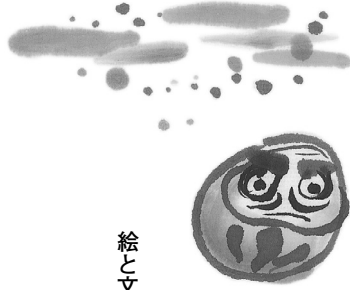
ほろ酔い詩歌紀行 — 酒を妻 日高昭二…11

庄野潤三の本 内野潤子…13

ボストンの薔薇・さいたまの菊 宮地智子…15

アルツハイマー病

新しい検査法と治療 杉本忠夫…17



絵と文 白い椿 中西美子…19

島尾敏雄と大泉黒石 志村有弘…20

絵と文 新型インフルエンザ 佐川毅彦…22

「最も語り難い思想」 志村栄守…23

〈優等生〉の行方 桐原良光…25

国語辞典で過ごすひととき 片岡義男…27

初七日に届いた葉書 新田啓造…29

絵と文 型絵染版画「ブルゲンランドの印象」展 さかもとふさ…31

ケータイ随想 永岡慶之助…32

森ちゃん 山本千明…34

「高齢者の語りに聞く」 上杉正幸…36

小説・江戸神仏歳時記(20) —新宿・皆中かいちゅういなり稻荷神社 郡 順史…38

表紙・グラビア…うるしギター

婚活の時代



池井 優
(慶應義塾大学名誉教授)

婚活―あまり好きになれない言葉だ。

婚活は、就職活動を略す就活にヒントを得た社会学者の山田昌弘氏が考案して提唱し、マスメディアが取り上げたため一挙に広まった。二〇〇七年十一月のことであった。山田教授が婚活という概念を考えるにいたった背景には日本の結婚をめぐる環境に変化があった。かつて年功序列、終身雇用に守られた日本の男性の職場は、バブル崩壊、不況の到来によって大きく崩れた。身分と収入両面での安定が望めなくなつたのだ。そうした男性の変化は、一方に男性に頼る専業主婦型希望の女性

の結婚観を変えた。一方、女性側にも大きな変化が生まれた。男女雇用機会均等法の制定をきっかけに女性の能力を十分活用しようと、各企業はこれまでものお茶くみ、コピーとりに象徴される男性の補助的役割、あるいは「職場の花」の存在から責任ある仕事を任せるようになり、総合職につく、さらには管理職を任せるまでにいった。こうした状況によって男性総合職対女性一般職という職場結婚の仕組みが崩れていった。

かつて、結婚相手を探すにはいろいろなパターンがあった。「ねえ、おばちゃん

んの知り合いの男性だけど、年齢は二十八、大学の法学部を出て、中堅企業に勤めているのよ。まじめで容姿もまあまあ。一度会ってみない」といったお見合い話をもつてくる世話好きがいたものだった。しかし地縁、血縁が薄れ、世話を買つて出るひとがいなくなり、恋愛の自由化、価値観の多様化によってお見合い結婚、そして前述の理由によって職場結婚も減っていった。

結婚相手を見つけるもう一つの手段は仲間を通じる方法だった。高校や大学のクラスメイト、サークル、ゼミなどの活動を通じて知り合った相手とデー

トを重ね、友人の祝福を受けながら結婚にゴールインするパターンである。

しかし、同じ部屋にしながらメールを交わす世代はなかなか会話が成り立たない。出会いから恋愛、さらに結婚へと持っていくことができないのだ。

こうして、とくに活動しなくてもなんとなく結婚できたシステムが崩れ、結婚のための活動すなわち婚活の必要性が生じたのである。結婚するカップルが減ることは、少子化につながる。そこで婚活を支援する動きが活発になった。ひとつは結婚情報サービスや結婚相談所の増加である。万単位の登録会員のなかから希望の相手を検索する、お見合いパーティーを開催し、男女がプロフィールカードを交換して二分間次々話していく「回転ずしトーク」、演劇をともし鑑賞する…などいろいろな仕掛けがある。ゴミ拾い、老人ホーム慰問などボランティア活動に参加する若い男女を募集し、地味な婚活支援に乗り出した地方自治体も出てきた。なんと婚活をセールスポイントにするプ

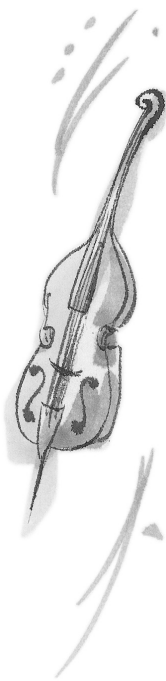
ロ野球チームまで現れた。日本ハムファイターズは札幌ドームに「KONKA TSUSHI」を設けて観戦者を募集、異性同士が隣り合うように席を配置して会話や応援を楽しんでもらい、試合中に席替えを四回おこなう。この企画は二〇〇人分の席に対し、二八六〇人が応募するヒットとなった。

だが、婚活に伴う「危険」も無視できない。身元も確かめず、会員を増やす悪徳業者によって、結婚相談所を既婚者がガールハントのために利用したり、パーティーの帰りに女性が勧誘に乗り出し高いスーツや指輪を買わされそうになった実はセールの偽装といったトラブルも目立つ。また婚活という言葉の軽さによる弊害も目立つ。離婚はバツイチという表現で「出戻り」といった暗いイメージを払しょくしたが、婚活は生活をともし、こどもを作り、末永く一緒に生きる伴侶を得るための活動であるはずだ。それが、受験や就職のように目標を掲げて点数を競うものとは違う。それにもかかわらず、ゲー

ム感覚のノリで婚活に励む手合いも多いという。

いまや婚活はマスメディアに頻繁に登場し、書店には『婚活』時代、『婚活入門』、『婚活なヒトビト』といったタイトルの本が並び、視聴率の低下に悩むテレビ局は、アラフォー女性の結婚活動を描いた「コンカツ・リカツ」(NHK)、草食系と呼ばれる男性の結婚への動きを追った「婚カツ！」(フジテレビ)のドラマを作成し、時代の流れに乗った。婚活からいい相手を射止めると「婚勝」さらに離婚活動を「離婚」リカツ」と表現するまでにいたると、いつかは消える流行語と違って日本社会の在り方にまで影響してきていると思われてならない。日本では年間八〇万組以上の結婚が生まれる一方、三〇万人近くのカップルが離婚するといふ。数年を経ずして生まれるカップルの数は増えないが、離婚は四〇万に達すると予測されている。安易な婚活と結婚は離婚の危機をはらんでいるのだ。

ジャズ熱中人



高橋 和島

(作家・郷土史家)

趣味に熱中する人々を取り上げるNHKテレビの番組はほぼ欠かさず観ているが、わが田舎町にも、あの番組の登場人物たちにひけをとらぬ熱中間がいる。

大病院の外科医を経て、父親の跡を継ぎ、わが町の開業医となったF先生(医学博士)である。

小学五年生の夏休みに自分で組み立てた鉱石ラジオから流れてきた進駐軍向け放送を聴いて病みつきになったというジャズへの傾倒ぶりは生半可ではない。

医学生時代は大学内で仲間を募ってジャズバンドを結成、開業医になってからは、二十年前に医院内にコンサートを開ける「スタジオF」という名の建物まで造ってしまった。

目いっぱい押し込んで百人ほどしか入らない小さなホールだが、この二十年間に二百十一回のコンサートを主催した。

この間の主な出演者を挙げると以下のような顔触れになる。

秋吉敏子、山下洋輔、日野皓正、森山威男、佐藤充彦、鈴木宏昌、板橋文

夫、菊地雅章、近藤大地、井上智、伊藤君子、酒井俊、高橋アキ、ケイコ・リー(李敬子)、エディ・ゴメス、マル・ウオールドオロン、ルー・タバキン、リチャード・デイビス、バリー・ハリス、ルイス・ナツシユ、ベニー・グリーン

。わたしはジャズの門外漢なので、この顔触れをどう見たらいいか、本当のところは判らないが、名の通った一流ミュージシャンばかりらしい。

にもかかわらず、入場料は当初三千円、最近は五千円だから、当然、足、

が出る。つまり、二百十一回のコンサートはみな、F先生の持ち出しで行われてきたのである。

今では隣町と合併して人口十一万ほどの地方都市の一部となったが、数年前までは住民一万二千の田舎町。その開業医が開くコンサートである。よけど、これだけのミュージシャンがやって来たものだと思える人が多いが、若い頃からジャズにのめりこんだF先生の音楽界の人脈は周囲が想像する以上に広く、近年は海外ミュージシャンからの出演申し出も、断るのに苦労するほどの数になっている。

F先生の話によると、コンサート出演のミュージシャンがやってくると、必ずご自分で車を運転して会場から二十分ほどのJRの駅まで出迎えに向かい、終演後は打ち上げの席を設けて、一緒に酒を酌み交わすらしい。こうした時間の中で、ミュージシャンたちとの交流を深め、親しい間柄となるので、いっそう人脈は広がり、出演者の確保に苦労することはなくなるといっわけ

だ。

ただし、F先生がこうした時間を持つのは、ミュージシャンとの人間的触れ合いを望むからであり、それを楽しみたいという気持ちがあるからだろう。

つまり、F先生のジャズ熱中度は、ただジャズ音楽を愛するという程度を越えているのである。

田舎町で百十一回もコンサートを重ねてこられたのは常連客がいるから。この中には電車で小一時間の距離にある名古屋とその近辺の都市はむろんのこと、東京、大阪、さらには驚いたことに北海道から駆けつける人もいた。

この人は登別の税理士で、かつては室蘭市内にジャズ喫茶を持ち、百回余のコンサートを主催したというから、F先生に劣らぬジャズ熱中人といえる。九年前から若くして病で急逝されたが、健在だったなら、その後もはるばる北の国から駆けつけてきたことは間違いないおひとなのである。

昨年（〇九年）十月、名古屋市内のホテルで、スタジオFの開設二十周年

を祝う記念パーティが開かれた。

F先生にエールを送ろうと勝手連が主催したのだが、コンサートの常連客やF先生と特に親交の深かったミュージシャンたち合わせて約四百五十人が集まった。

わたしも駆けつけた一人だが、おまえさんもジャズファンなのかと問われたら、首を横に振る。

百十一回のコンサートの三分の二くらいは聴きに行っているはずだが、有名なミュージシャンの演奏を聴いても、とくに引きこまれたことはない。それなりに楽しんで来たものの、陶醉したことも高揚感に浸ったこともない。だから、心底ジャズを楽しんでいる人達を見ると、羨ましい。

おれは典型的な日本人だから、DNAが黒人の音楽であるジャズを受け付けないのだと自己弁護しているが、本当のところは、歌謡曲か民謡くらいしか耳にしない貧しい少年時代を過ごしたせいだと思っている。

国技館

堂
昌
一



私の住む両国は、花火と相撲でよく知られる。この地は江戸時代もとても繁栄した歓楽街で、いろいろな話が残る。一番に忠臣蔵だろう。吉良ゆかりのお寺「回向院」建物が変わったがこの地に残り、江戸の怪盗「ねずみ小僧次郎吉」のお墓がある。墓の前にはけぶり石があり、誰言うとなくその石の粉を持つと金が入るといわれ、お参りの人が絶えない。この隣にあった国技館、今は両国駅近くに大変立派な建物になって、相撲の外にいろいろなイベントに使われている。

現在両国はマンションが次々と建って昔の風物は亡くなってしまったが、国技館に隣接している「江戸東京博物館」に行くと、昔の面影に多少触れる事が出来る。

尚、ねずみ小僧は

俗名 中村次郎吉

改名 教覚速善居士と記されている

ガラスのこゝろ



安 森 敏 隆

(同志社女子大学教授・ポナム代表)

高校生から五七七の短歌を募集する「SEITO百人一首」をはじめ七年度になります。今年、全世界の高校生から一五〇〇人のおおよそ三〇〇〇首の短歌が寄せられ、新書版の『31首 青春のこゝろ』(NHK出版・七六〇円)が、北京フェンシング銀メダリストの太田雄貴選手が、これらの歌を読み感動して、「家族との語り、友人とのメール、受験勉強、恋。僕にロンドン五輪に向けて全力を尽くす勇気を与えてくれました」という「帯文」を寄せてくれて話題になっています。

す。何万首という多くの歌の中から「一〇〇首」を選び出してみると、まことに良い歌が集まり、高校生の「気持ち」と「こゝろ」が、ヴィヴィッドに伝わってきます。そのなかから、五、六首引用してみたいと思います。心と気持ちを、どのように今の高校生がとらえているかということです。

「ガラスの心」と「心の鍵」

今年、こんなガラスのような「こゝろ」の歌に出会いました。

・傷口にクスリをぬっても治らない十七歳のガラスの心(西村美沙緒 岡山南高校 二年)

私は、傷口があるんだけど、いくら良い薬を塗ったって治らない。私は「十七歳のガラス」のような心を持っているのだと。大抵は薬を塗ると治るのだけれども、「ガラスの心」は、薬を塗っても治らない、とても繊細でかたくなな心を皆さんも一つは持っているのではないのでしょうか。十七歳の「ガラスの心」を、どう溶かして、どうす

るのか、青春の一つの心をうまくうたっている歌です。

・朝父に「おはよう」という言葉さえ心の鍵がじやまして言えず（野上 恵 伏見工業高校 二年）

それから、皆さんもよくあるかもしれないことですが、素直だなと思う一首がありました。小さいときはお父さんに「おはよう」と言っていたのが、高校や大学生になってくると心に鍵がかかってしまうのか、いつも言いたいのだがどうしても言えない。そんな「心」を、この歌はうまく捕まえて素朴に、直裁にうたっています。

最前線の「命」の現場

「気持ち」と「こゝろ」でいいのですが、さらに「命」の歌も出てきます。

・何回もいじめられてもあきらめず明日を信じて今日も頑張る（溝端晃一 近畿大学付属高校二年）

・自らの命断つ子を知る度に母はつぶやく「いらんこなんかおらんに」

（浜辺尚子 近大付属高校一年）

〈いのち〉のメッセージの歌。自らの命を絶つた子へ「いらん子なんかおらんに」と言う母の慈愛にみちた声を伝える歌。それぞれに命の尊さをうたい、自己の〈いのち〉の問題としてうたわれている。

短歌の歴史は、挽歌にしろ、相聞歌にしろ、雑歌にしろ、常に〈いのち〉を見つめ〈いのち〉をうたってきた。

この世の生きとし生けるものへの哀憐や共感をうたうことよって一四〇〇年間、一人一人のかけがいのない〈いのち〉をリレーして、今日までうたい継いできたのである。さらに〈いのち〉の最先端を見つめて、しっかりとうたって欲しい、とおもいました。

サラリーマンの魂

・魂をぬかれたように眠ってるサラリーマンが今日も目の前（塩崎将一郎

同志社香里高校 三年）

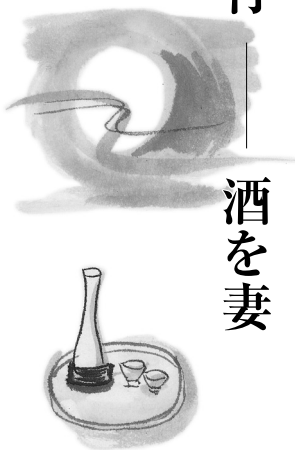
また、「こゝろ」の問題をさらに止揚させた、現代のサラリーマンの「魂」の歌もうたわれていました。この歌を見ている限り、高校生達の社会を見る眼、世界を見る眼のクールでまことに的確であることが解って安心しました。

学校への行き帰りの電車の中の出来事でもありましょう、か。座席の前の「魂をぬかれたように眠ってるサラリーマン」をみごとにとらえて形象化しています。多分、このサラリーマンの疲れて眠っている姿の中に、現代の大人達の姿や、未来の自分の姿も見取ったのではないでしょうか。

このような感じで、「青春のこゝろ」の歌を、三〇〇〇首の応募歌の中から一〇〇首選んでおります。皆さんと同じような「青春のこゝろ」がキラキラと出てきていて結構いい本だと思います。早速、読んでみて下さい。

ほろ酔い詩歌紀行

酒を妻



日高昭二

(神奈川県大学教授)

酒飲み之歌にもいろいろあるが、豪放さを句に詠んだことで知られる江戸の俳人がある。芭蕉の門弟になる宝井其角である。彼の句には、酒をめぐりさまざまな風景が、独特な所懐とともに映しだされているのを随所にみるこ
とができる。

酒を妻妻を妾の花見かな

妻を伴って花見に出かけた折の句である。彼にとっては、酒がなにより 동반者であって、今日の花見のときでも女房など妾の位置に貶しても何ら差支えない、というわけだろう。

名月や居酒のまんと頬かぶり

十五夜の晩に居酒屋に赴き、酒を飲むもうとした折の句である。「頬かぶり」とは、彼が活躍した元禄当時でも、居酒をするなどあまり体裁のよいことではなかったということでもあろうか。

同じ「名月」でも、「花やかなること其角に及ばず」と芭蕉が高く評価した「名月や畳の上の松の影」という写生的な名句があつて、これと「頬かぶり」の句が比べられるのも無理はない。むしろ、後者の句は、いささか分が悪い。しかし、その逆も言い得よう。月の光が煌々とあたりを照らして、隠れることさえできない十五夜の晩に「頬か

ぶり」しても酒が飲みたいといは、いかにも其角らしい。

十五から酒をのみ出てけふの月

これも月と酒にかかわる句であるが、これには句の前に「琵琶行を読む」とあるので注釈がいる。手元にある注釈書、たとえば高木護の『其角俳句新釈』（大正十三年）や、岡倉谷人『其角の名句』（昭和三年）によれば、「琵琶行」とは、あの白楽天の詩であるとして、二人とも同じく次のように説明している。

すなわち、白楽天が月見の折に女人の奏でる琵琶の音を聴いて心を打たれ、

その絃声の「急雨」また「私語」とも
いふべき妙なる音色について尋ねると、
彼女は「十三学得琵琶成」と答えたとい
う。其角の句は、この「十三より学
得し」になぞらえつつ、では君のよう
な「無風情の人」に「一芸ありや」と
聞かれれば、自分は「十五から酒を飲
み習つて」といふしかないというわけ
なのだ。

つまり、「琵琶」ならぬ「酒芸」を言
い募つた豪胆さが、この句の生命線だ
ということになる。こうして其角の句
には、一見して注釈を要しないと思わ
れるところにも、さまざまな故事がひ
そんでいるので注意がいる。

故事といえは、次の句にもそれが巧
みにひそんでいゝらしい。

紅葉には誰が教へける酒のかん

これは、かつて高倉帝が、禁廷の衛
士が紅葉を焚いて酒をぬくめたのを咎
めることなく、むしろ「林間煖酒紅葉
焚」の風流だと仰せられた故事にちな

んでいゝという。それを受けてこの句
は、紅葉狩の折りに酒をぬくめた人が
あつて、その爛がとも上手だったの
を称えた句だということになる。どう
やら、酒の爛の良し悪しは、今も昔も
大事なことであるらしい。

酒買に行か雨夜の雁孤つ

この句については、おそらく注釈は
不要であろう。だが、そうは言つても
この句がたたえているある種の気分に
浸るのでなければ、本当のところは味
わうことはできなからう。といつても、
このときの其角の気分には、何か奥深い
ものがあるといふわけでもなさそうだ。

雨夜のさびしさに孤雁の啼き渡るのを
聞いて、あれは酒を買いに行くのであ
らうと詠んだ句には違ひなからうが、
そのいわば見たての面白さに、こちら
が興ずることができるといふかが分か
れ目になるだろう。

もともと雁は、「使いの鳥」とも呼ば
れており、そして昔は酒を買いに行く

ことも日常的にしばしば見受けられた
ことではあつた。しかし近年は、酒屋
まで何里などということはめつたにな
く、近くのコンビニに行けば、酒は手
軽に入手できる時代である。まして雁
の行く方など都会では見ることもでき
ないし、さらに雨夜の孤雁を酒買いと
見立てる想像さえすすでない。

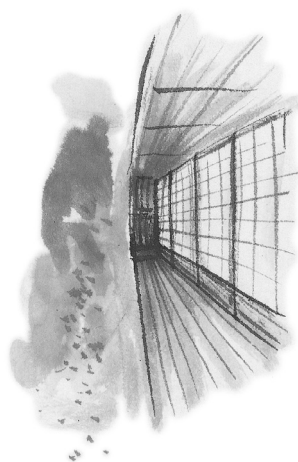
大酒に起てものうき捨哉

明日から初夏、袷に着替へるとき。
春の別れに大酒を飲んで、宿酔のため
にそれも物憂い。季節の変わり目の一
瞬に、これまた酒飲み気分がするど
く表象された一句と言えよう。

初夏といえは、もう一句「越後屋に
きぬさく音や衣替」の句が思い浮かぶ。

「越後屋」とは、いうまでもなく三井
呉服店のこと、すなわち三越百貨店の
前身である。さきの袷を着るにも物憂
い初夏の宿酔にくらべて、こちらは新
しく衣を作ろうとして絹を裂く音が、
するどく耳にこだまする。

庄野潤三の本



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

夫が四年前亡くなって生活が一変した。

朝の雨戸を開けるのも自分でしなければならなくなった。五枚のサッシの雨戸の五枚目の端は夫の手垢で黒くなっている。

雨戸は自然に開くものと思つて長い間過ごしてきた。今までの事のない仕事も、娘や孫にはかり頼れないので、独りの時間は独りで創り出すことになった。

なぜか体が重くなつて息を切らしてする仕事が多くなつた。

新聞を束ねる、ストーブに石油を入れるというような些細(ささい)なことでも始めて生活の中にとり入れるのは重荷だった。

大好きだった本も眺めるだけで少しも読む気がしなくなつた。心も重くなつていたらしい。ところが、この秋九月二十一日に、誰より好きな作家庄野潤三が死去された新聞を読んでから、突然本が読みたいという気がしたのである。

庄野さんの作品に触れたのは、二十代の若い頃のこと、丁度自分と同世

代の暮らしが隣人の話を聞くように親しく思われたのだ。

庄野さんは私の夫と同じ齡で大正十年の生まれであるのも分かった。本屋で始めて手にした作品は「旅人の喜び」という一冊であった。今、後書きを見ると昭和三十八年二月に出版されている。

先ずその本の扉には次のような作者の言葉が書かれている。

「戦争中に女学生で日の丸の鉢巻をして工場へ通つたような人が、戦後になんぞそれぞれ結婚して、子供も生れて、普通の奥さんとして暮らしている。そういう女の人は、いったいどういう気持ちで日常生活を送っているのだろう。素晴らしいといえるようなことは少しも起らなくて、これは詰らないと思つているか。いや、これが当り前で、無事なのが何よりと思つているだろうか。それとも、その両方とも本当なのだろうか。

「旅人の喜び」は、そんなことを考えながら書いた小説であるが、このよ

うな疑問は、多分、まともな気持ちで生きている人にとつては、永遠に続くものかも知れないのである」

全く自分のことを代弁してくれているような内容が私を捉えたのだった。

その当時、私も小さい娘と夫との平板な毎日を、時には喜びとして又、時にはもう少し楽しいことがないものかと不満を感じながら暮らしていたのである。

それ以来の読者である。たまたま庄野さんの作品と同じように、私も子供が三人となり三人が結婚し、夫婦二人の暮らしとなり、孫が次々に生まれるという成り行きになって、そのことも惹かれた理由のひとつかもしれない。

私は本棚から次々に庄野さんの本を取り出して夢中で読み返しはじめた。

耳鳴りや、不整脈や体の不調も忘れて、只々朝夕読書を楽しんだのである。まるで飢えた人がおいしい食べ物を得たように、その時間の満足感が私の活力を少しづつよみがえらせてくれた。

本の力であった。中でも庄野さんが

幼い子供三人を妻の母に預けて、ロックフェラー財団の招きで一年間米国のオハイオ州ガンビアで暮らした作品「ガンビア滞在記」や「懐かしきオハイオ」「シェリー酒と楓の葉」が好きで、何というおいしい本だろうとのめり込んで読み返した。

若い時に読んだのとは又違った発見や味わいがあった。昼も夜もひまがあると読んでしまった。

作者の庄野さんの魂が、私の鬱を追い払ってくれたとしか思えない。今日ここまでと眠る前に本に葉をはさみ、明日を待つ心が嬉しさを呼び戻してくれた。

亡くなってから、多くの人が、庄野作品について語っている。雑誌や新聞の追悼の文章を見ると、ある人は「小説を超えて日常性を聖化した作風である」とのべ、又ある人は「平凡な日常を意志と努力で綴られている」とも書かれているが、私が庄野文学に惹かれたのは、平易で変化のない日常の中こそ幸せがあるという思いが伝わっ

て来るからだ。

日常の当り前のこと、家族とのゆきかいや食事や、近隣との交りや心ここになければ見すごしてしまうことに光を当てた晩年の作品は、老いて登りつめた大きな境地のようにも思えた。私の本棚にはそのすべてが並んでいる。夫を送った後の喪失感を救ってくれたのが庄野さんの本であったという喜びは大きい。

それも亡くなったのをきっかけにしての再読であった。近年、作品がどの雑誌にも見当らず、心配していた折の訃報であったので、どのようにして逝かれたかが知りたかった。

文庫本に再版された「けい子ちゃんのかた」の後書きに長女の今村夏子さんが書かれた文章で知る事ができた。八十五歳で倒れ病院から自宅に帰られ、要介護五の体を家族や医師や、介護のプロの方々に温かく看取られ八十八歳で他界されたという事であった。